HAWTHORNE

THE SCARLET LETTER

FUKAGAWA

Kenkyusha English Classics

THE SCARLET LETTER

BY

NATHANIEL HAWTHORNE

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

Y. FUKASAWA

PROFESSOR OF ENGLISH IN WASEDA UNIVERSITY

TOKYO

KENKYUSHA

1928

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS

研究社英文學叢書

大正十一年二月 七 日印刷　大正十一年二月 十 日發　行
昭和 三 年九月二十日印刷　昭和 三 年九月廿五日訂正三版發行

主幹者　岡倉由三郎
主幹者　市河三喜
發行兼印刷者　小酒井五一郎
東京市麹町區富士見町六丁目五番地
印刷所　研究社印刷所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發行所　研究社
東京市麹町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番

非賣品

新榮社製本所

序

本書は Hawthorne の四大傑作 (*The Scarlet Letter, The House of the Seven Gables, The Blithedale Romance, The Marble Faun*) の隨一とせられる丈あつて、各章とも頗る緊張した文である爲め、註す可き箇所多く、取捨に甚だ苦しんだが、紙數の許す限り多く載せる事とした。

本書の註釋は語句よりは構文の說明に重きを置き、一般讀者にやゝ難解と思はるゝ所は全文を譯出した上、その中の語句を說明することゝした。

本書の註釋としては英文の註は素より、參考とす可きものが一種も無い。その上、私は本書の背景となつて居る新英蘭の風俗習慣を研究したこともなく、Puritanism は云ふまでもなく、一般基督敎にも通ぜず、聖書の知識に乏しい爲め、或はそれらの事柄の中、當然註す可き事をも知らず識らず逸しはすまいか、基督敎に通じて居たら、更に深く本書の味ひを讀者に傳へることが出來はすまいかと、筆を執りながらも、絕えず、不安を感じて居た。特に Henry James の *Hawthorne* 中

"Out of the soil of New England he [Hawthorne] sprang—— in a crevice of that immitigable granite he sprouted and bloomed. Half of the interest that he possesses for an American reader with any turn for analysis must reside in his latent New England savour; and *I think it no more than just to say that whatever entertainment he may yield to those who know him at a distance, it is an almost indispensable condition of properly appreciating him*

to have received a personal impression of the manners, the morals, indeed of the very climate, of the great region of which the remarkable city of Boston is the metropolis."

の如き文あるを見るに及んで、愈その感を深くした。それで若しさう云ふ點に關して幸に大方博雅の敎を乞ふことが出來たら、再版の折に訂正なり增補なりして、少しでも完全に近いものにしたいと思つて居る。

大正十一年一月　　國賓ジョッフル元帥を迎へた日

深澤由次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

CONTENTS

INTRODUCTION

PAGE

I. NATHANIEL HAWTHORNE 小傳 i

II. "THE SCARLET LETTER" に就いて . . . xviii

III. "THE CUSTOM-HOUSE" に就いて xx

IV. "THE SCARLET LETTER" 梗概 xxiii

V. HAWTHORNE の著作に就いて xxvii

VI. HAWTHORNE に關する著書 xxx

VII. N. HAWTHORNE 年代表 xxxi

THE SCARLET LETTER

I. THE PRISON-DOOR 1

II. THE MARKET-PLACE 3

III. THE RECOGNITION 14

IV. THE INTERVIEW 24

V. HESTER AT HER NEEDLE 32

VI. PEARL 43

VII. THE GOVERNOR'S HALL 55

VIII. THE ELF-CHILD AND THE MINISTER 63

IX. THE LEECH 73

X. THE LEECH AND HIS PATIENT 85

XI. THE INTERIOR OF A HEART 96

XII. THE MINISTER'S VIGIL 104

XIII. ANOTHER VIEW OF HESTER 117

XIV. Hester and the Physician 127
XV. Hester and Pearl 134
XVI. A Forest Walk 142
XVII. The Pastor and His Parishioner 149
XVIII. A Flood of Sunshine 160
XIX. The Child at the Brook-side 167
XX. The Minister in a Maze 175
XXI. The New England Holiday 188
XXII. The Procession 198
XXIII. The Revelation of the Scarlet Letter . 211
XXIV. Conclusion 221

NOTES 229

INDEX TO NOTES 335

INTRODUCTION

I. NATHANIEL HAWTHORNE 小傳

Nathaniel Hawthorne は 1804 年七月四日(米國獨立第二十八回紀念日)を以て Massachusetts の Salem に生れた。祖先は東印度貿易に從事した航海業者であつた。祖父は "Bold Daniel" と呼はれ、獨立戰爭中 Privateer (政府の許可を得て敵船捕獲に從事した船)を指揮した。更に遠い祖先には裁判官が有り、これは十七世紀に於ける魔女糺問の裁判に關係した。Hawthorne の一族は淸敎徒の面目を遺憾なく備へ、一般淸敎徒よりは嚴格とせられてゐた。父の Nathaniel Hathorne も船長であつたが Hawthorne (彼は Bowdoin College 在學時代から姓に w を加へて Hawthorne と綴つた) が生れて四年後の 1808 年に母と Hawthorne と娘二人を遺して Surinam で病死した。母は氣品の高い才色兼備の婦人であつて、夫の死後は全く世間と絕ち、子女の敎育に專念して居た。父は沈默寡言、嚴格憂鬱の人で、航海中も暇ある每に書物に親んで居た。Hawthorne は性質容貌共父その儘であつたと云ふ。(容貌は寧ろ母親に似て居たと云ふ說もある。)

1871 年と 1873 年とに Portland の *Transcript* 紙上に Hawthorne が十二歲以來書いて居たと云ふ日誌の拔萃が出たが、それに依つて見ると Hawthorne は子供の時から思慮深く、文章に於ても、觀察に於ても、頗る早熟してゐた事を示して居る。Hawthorne の父が死んだ時には殆ど財產が無かつたので、祖父の Manning が一家を引取つて世話をした。そこには伯父も伯母も澤山あつて Hawthorne を可愛がり、一意、彼の幸福を念じてゐた。祖父は Maine

の Raymond に廣大な地所を持つてゐたが、Hawthorne は十四の時、そこで約一年を過した。その附近には Sebago Lake と云ふ有名な湖水があつて、Hawthorne はその上で氷滑りをするのを何よりの樂しみとして居た。この一年間は Hawthorne の忘れる事の出來ない樂しい時であつて、晩年になつてから當時を追懷して次のやうに言つたと云ふことである。

"I lived in Maine like a bird of the air, so perfect was the freedom I enjoyed. But it was there I got my cursed habits of solitude."

"Here I ran quite wild, and would, I doubt not, have willingly run wild till this time, fishing all day long, or shooting with an old fowling-piece; but reading a good deal, too, on the rainy days, especially in Shakespeare and 'The Pilgrim's Progress,' and any poetry or light books within my reach. Those were delightful days; for that part of the country was wild then, with only scattered clearings, and nine-tenths of it primeval woods."

Hawthorne は 1818 年の秋故鄕 Salem に歸り、それから三年の後 Maine, Brunswick の Bowdoin College と云ふに入つた。詩人 Longfellow も當時の學友の一人であつたが、後の大統領 Franklin Pierce 及び海軍武官 Horatio Bridge とは特に親しかつた。實に Horatio Bridge は Hawthorne に取つては兄弟も啻ならぬ親友で、後年 *The Snow Image* を同人に dedicate して

> "If anybody is responsible for my being at this day an author, it is yourself."

と言つて居る。

Bowdoin College に於ける彼の學生々活に就いては何等特記す可き事は無い。唯、骨牌遊びをして罰せられた事に就いて友人と母親とに送つた二通の手紙が遺つて居る。

Bowdoin Coll., Brunswick, May 31, 1822.

My Dear Friend,

As I intend that you shall have no cause of complaint for my neglect this term, I take this early opportunity of writing to you. There is no news here, except that all the Card-Players have been found out. We have all been called before the Government, two have been suspended, and several more, myself among the number, have been fined. The President has written to all the parents of those who were found out, and to my mother among the rest. If Uncle R—— hears of it he will probably take me away from College.....

I have been much more steady this term, than I was last, as I have not drunk any kind of spirit, nor played cards, for the offence for which I was fined was committed last term. The reason of my good conduct is that I am very much afraid of being suspended if I continue any longer in my old courses.....

I remain, your friend,

N. H.

I believe the President intends to write to the friends of all the delinquents. Should that be the case, you must show the letter to nobody. If I am again detected I shall have the honour of being suspended. When the President asked what we played for, I thought it proper to inform him it was fifty cents, although it happened to be a quart of wine; but if I had told him of that, he would probably have fined me for having a "blow." There was no untruth in the case, as the wine cost fifty cents. I have not played at all this term. I have not drunk any spirits or wine this term, and shall not

till the last week.

（これは上の手紙を出した前日に母親に送つたものである。）

1825 年に Hawthorne は二十一歳で Bowdoin College を卒業した後、鄕里 Salem に歸り、十二年さ云ふ長い歳月の間、その古い邸の所謂 "haunted chamber" に閉ぢ籠り、隱遁的生活を續けて居た。それから三年後の 1828 年に *Fanshawe* さ云ふ處女作を匿名で出した。これは田舍の學校（實は母校 Bowdoin College）に起つた奇怪な誘拐事件を描いたもので、餘り長くない、探偵小說めいたものであつた。主人公 Fanshawe は年若くして世を去つた浪漫的な、陰欝な、内氣な少年であつた。この作にはまだ所謂 Hawthornesque（「ホーソーン張り」）さ云ふものは殆ご認められなかつた。彼の學友は皆 Maine 州の人で往來する機會はなく、母は全く世間さ交らなかつたが爲に Hawthorne は全然孤獨の生活を續けて居た。併し彼はこの間に古代神話や、*Arabian Night's Entertainments* や故鄕 Salem の古い歷史等を研究し、就中、C.W. Upham 著の *Salem Witchcraft* に就いて魔術の盛に行はれた時代を研究し、それらを材料に多くの短篇を物し、機會ある毎に新聞雜誌に揭げてゐた。"Gentle Boy" その他數篇は書肆 S. G. Goodrich 氏の經營して居た雜誌 *The Token* に初めて揭載せられた。併しその草稿の大部分は燒き棄てゝ了つた。その中には彼の作中、最も力あるものもあつたが、病的の感じがするさ云つて世に出すを欲しなかつた。何でも讀み返して見て思想が健全でないさ嘘を言つたやうな氣がしていけないさ云つて居た。

この間に Hawthorne は New England や New York 附近を旅行して、後に其作に描かれた自然の相(すがた)を親しく研究した。1836 年に當時の最も有名な雜誌 New York の *The Nickerbocker* などの寄稿家さなり、同年には Goodrich 氏の爲に *The Token* を編輯す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

る傍、妹の助を得て少年萬國史を編纂し、書肆 Goodrich 氏の號 "Peter Parley" の名で世に出した。

この頃 Hawthorne の學友は或は政界に入り、或は詩人文人實業家としてすでに相當名を成して居たが、Bowdoin 學校時代の才人 "Oberon the Fairy" を忘れず(彼等は Hawthorne が美少年であり、且つ、即座に物語を作り得るので常に斯う呼んで居た)、Hawthorne の爲に時の大統領 Van Buren に依賴して或る地位を得てやつたが、Hawthorne は當時の政情に慊らず且つ政治を解せずと言つて辭して了つた。Hawthorne の言に依ると、「自分には新聞と云ふものが分らない、歴史も少くとも百年位古くならなければ、自分には分らない」と言つて居た。併し親友 Horatio Bridge は何かの方面で Hawthorne に名を成さしめなくてはならないと云つて、或時、彼を訪問し「何もしないとは腑甲斐ないではないか」と彼を責めた。そこで Hawthorne は「書肆 Goodrich 氏に依賴して何か出して見る積りだ」と語つた。Bridge は直ちに Goodrich 氏を訪ねて「貴君から貴君自身の考へから出たやうにして Hawthorne に手紙をやつて、今まで出したものゝ中から一卷の短篇集を集めて出すやうに勸めて貰ひたい、それから報酬としては普通の印税にして貰ひたい、その代り書物が賣れなければ費用は自分が負擔する、併し自分が貴君に依賴した事は Hawthorne には内證にして置いて貰ひたい」と賴んだ。Goodrich はその言に從つて *Twice-Told Tales* の第一輯を出した。其時の契約に依ると Hawthorne は百弗貰ふことになつて居たが、果せる哉、書物はさつぱり賣れず、Hawthorne の手には一文も入らなかつたとの事である。

この頃から Hawthorne の文名漸く著はれ、多くの雜誌社は爭うて彼を雇はうとして、終に彼は謂はゞ自分の機關雜誌とも云ふ可き *Democratic Review* を得た。彼の友人はまた彼の爲に公職を得させようとして頻りに奔走し、其結果、1839 年に至つて時の Boston

稅關長 Bancroft 氏は彼を稅關の官吏に任命した。この時の給料は極めて菲薄なものであつたけれども彼に取つては大切のものであつた、と云ふのは、當時彼は既に Salem の醫者の女 Sophia Amelia Peabody と婚約が成立つてゐたからである。Peabody の家には子女が六人有り、生計は豐では無かつたけれども三人の女には立派な教育を施し、何れも賢婦人に生ひ立つた。長女 Elizabeth は當時 Harvard 大學に神學を修めて居た Emerson に就いて希臘語を學んだが、Emerson は彼女が米國思想界に貢獻した事を大に推賞して居た。Mary は有名な教育家兼政治家 Horace Mann に嫁し、其手に成つた良人 Horace Mann の傳記は米國有數の書の中に算へられて居る。Sophia は子供の時から病身であつたが博く書物を讀み、詩的情操を具へて居り、畫家 Allston に就いて繪畫を修めてゐた。それで三年に亘つた二人の courtship 期間は Browning 夫妻のそれほど浪漫的では無かつたけれども (Browning 夫人も病人であつた) 實に淸く、樂しく、其間に取交はされた手紙は相思の人の記錄中、得難きものとせられて居る。Hawthorne が初め Sophia に會つた時の事に就いて面白い逸話が傳はつて居る。Hawthorne の短篇が折々雜誌に出た頃、すぐ近所に住んで居た Peabody の姉妹は Hawthorne の姿を見た事が無いから、Hawthorne の姉妹の何れかの筆に成つたものと思ひ込んで居た。*Twice-Told Tales* が出るに及んで姉の Elizabeth から Hawthorne に交りを求めたのであるが、Peabody の姉妹は、もつと親しくこの作家の謦咳に接したいと云ふので、その友達の家に茶話會を催し、其處へ Hawthorne を招く事にして、自分等は豫定の時刻に其處へ行つて待ち受けて居た。すると、其處へ招かれた他の婦人連も時間を違へず集つて來た。やがて Hawthorne は其席へやつて來たが、思ひがけなく多數の婦人が居たので、彼は氣を呑まれてぢつと突つ立つたまゝ身動きもせず、栗鼠か兎のやうに今にも逃げ出し

さうなけしきであつた。Hawthorne は愕然として眞青になりぎまぎして了つた。そばに卓子があつたので落つきを見せようとその上にあつたものを取り上げては見たもの〻手がぶるぶる震へるので急いで下に置いて了つたと云ふ事である。この時 Hawthorne は三十五歳であつた。

Hawthorne 親子は不思議に Democrat 黨に屬して居たが、二年後に同黨勢力を失ひ、Whig 黨が政府に立つやうになると Hawthorne もまた職を奪はれて了つた。この時、彼は二年間の勞働の結果として 1,000 弗を貯へて居た。彼は 1841 年四月當時の超越主義者 (Transcendentalists) 中の共產主義的集團たる「Brook 農園」に加盟したが約一年の後同所を去つて了つた。

1842 年七月九日 Hawthorne は Sophia と結婚した。時に Hawthorne は三十九才、Sophia は三十二歳であつた。彼は結婚後直ちに Concord の Old Manse (「古き牧師館」) に移り住み、四年間、世の常以上の詩的幸福の生活をした。その間の模樣は *Mosses from an Old Manse* の序文に詳しく出て居る。

この古い屋敷には牧師が幾代か續いて住み、この村を淸敎主義から自由主義に導いたものである。獨立戰爭中、第一回の衝突もこの屋敷の窓下で演ぜられ、當時こゝに住んで居た Emerson の祖父は屋內からその模樣を目擊したとのこと、Emerson の父は常に自分もその日は "in arms" であつたと冗談を言つて居たさうである [Emerson の父は當時また赤子であつたので母に抱かれて (in arms) 居たのを武器を取つて (in arms) 居たのに掛けた洒落。] Emerson が最初の書 *Nature* を書いたのも Hawthorne が *Mosses from an Old Manse* を書いたと同じ室である。Thoreau が森林生活を營んだのもこの附近である。この屋敷の近くには Concord 川と云ふ溪流が流れて居り、その中には美しい嶋が所々に點在し、春夏の頃には百合の花が咲き亂れ、秋冬には紅葉の錦に飾られて居た。ま

た、夏は端艇遊び、冬は氷滑りで賑はつた。この屋敷は Hawthorne 夫婦の爲には理想的すまひで、二人は體の達者を何よりとして暮して居た。併し貧困は隨分甚だしく、或時 Hawthorne が椅子にさわるとすぐにその腕がとれたので、彼は嚴めしく "I will flee the country" と云つて細君を捧腹絶倒させたと云ふ話もある。また、或時は dressing-gown に恐ろしく大きな穴のあるのを見て「おれはこの界隈で一番大きな rents を持つてるのに、現金が無いとは不思議だ」と洒落たさうである。また Hawthorne は「クリスマスに僕の所では椢梓(まゆみ)と林檎の砂糖漬、棗耶子、麵麭、乾酪、乳と云ふ本當に paradise 的の食事をした」と言つて居た。

Hawthorne が親しく接した婦人は Sophia 一人であり、Sophia が初めて交つた男子は Hawthorne だけだと云ふので、二人は自分等をいつも Adam と Eve と呼んで居た。從つて Concord のこの Old Manse をは Eden と稱して居た。或時、友人 Hillard (*Six Months in Italy* の著者) に次の樣な手紙を送つたことがある (1843 年十一月二十六日附)。

「濟まないがいつか暇な時に、Munroe 書店へ行つて *Twice-Told Tales* の模樣を訊いて呉れ給へ。この前の計算 (一年計り前) ではまた出版費を償はないと云ふことだが、もうさうで無いかも知れぬ。…… あれ位賞め立てられたんだから賣れない筈はないんだが、一體、どうした譯だ。二人共至極壯健、例に依て馬鹿に仲がいゝんだ ("preposterously happy")。安心して呉れ給へ」

Twibe-Told Tales は四五年掛つて 600 册許り賣れたさうである。

斯う云ふ貧しい中でも Hawthorne は下宿人を置かうとはしなかつた。其頃友人 Margaret Fuller の妹が詩人 Ellery Channing と結婚した際であつて、二人に同居して貰つてはどうかと云ふ話も

あつた。所帶の辛さを日々味つて居る細君はすぐそれに贊成したが Hawthorne は次のやうな手紙を送つて婉曲に斷つた。

Dear Margaret,—

Had it been proposed to Adam and Eve to receive two angels into their paradise, as *boarders*, I doubt whether they would have been pleased to consent.—

Hawthorne は文人に接するを好まなかつたが Concord で會つた人々についてはさうでも無かつた。彼は詩人 Ellery Channing (これは「詩人の讀む詩を書く詩人」と Emerson が評した人で、その詩の中には Hawthorne も幾度か入つて居た) とも交はり、Thoreau とは特に親しく、彼はその端艇 "Pond Lily" に Hawthorne を乘せてはよく遊んだものだ。Hawthorne が Emerson と親しかつたことは誰も知る所だが、Margaret Fuller, Miss Elizabeth Hoar など云ふ婦人とも交つた。

1844 年三月三日に女の子が生れた。Hawthorne は "Fairie Queene" 中眞理の化身として現はれて居る美人の名を取つて Una と名づけた。その子の爲に大きな猫を貰つて來てそれに Lion と名づけたなど Hawthorne の喜は想像に餘りあつた。貧困は容赦なく犇々と迫つて來た。所が當時また James Knox Polk を大統領とした Democrat 黨が政府に立つたので Hawthorne の友人等はすぐさま彼の爲に奔走した。その頃細君が母親に送つた手紙に次のやうなのがある。

「世間で報酬(原稿料)の點をちやんとして下されは私共の幸福には斯うした影はなかつたのです。併し昨日 Franklin Pierce 樣と Horatio Bridge 樣とがおいでになつて確實な希望を與へて下さいました。其時主人(あるじ)は小屋の中で薪を切つて居ましたが、Bridge 樣は主人の姿を御覽になると、すぐその方にいそい

そこ歩いて行かれました。Pierce 様もそのあとへついて行かれました。小屋から出て來たのを見ますと、Pierce 様は古い紺の上着の上から主人の體を抱くやうにしてゐました。お友達の方々が良人を大事にして下さる事と云つたらありません」

Hawthorne は斯樣に貧乏と戰ひ乍らも *Democratic Review* の爲に多くの名篇を書いた。併しこの雜誌は徒らに氣位計り高くて善い原稿料を拂はなかつた。細君が報酬が善くないとこぼしたのもこれらを指したので有らう。*Twice-Told Tales* の第二輯を公にしたのもこの頃であつた。1846 年鄕里 Salem へ歸つた年、Old Manse で書いたものを集め、*Mosses from an Old Manse* (「古牧師館の苔」) と題して公にした。この中には "Rappaccini's Daughter," "Young Goodman Brown" のやうな傑作が含まれてゐて、物語作者としての彼の天才の絕頂であつた。

1846 年 Hawthorne は友人の盡力に依り Salem 稅關の檢量官に任命された。この時の官吏生活の模樣は *The Scarlet Letter* の Introduction: "The Custom-House" の中に巧みに描かれて居る。序ながら、この一文は Lamb の最も善い essay に比して遜色なしとの評がある。

1848 年十一月 Whig 黨の General Zachary Taylor が大統領に選はれた。翌 '49 年六月 Hawthorne はその大作 *The Scarlet Letter* の著作中突然職を罷められた。表面の理由は Hawthorne が醉漢共と遊んで計り居たからだとも云ひ、また、Salem の Democrat 派の新聞紙 *Salem Advertiser* に政治上の論說を書いたからとも云つたが、之に對して Hawthorne は自分が該新聞に書いたのは劇評二篇 Ballard Vale に於ける野球の評、Longfellow の *Evangeline* 及び他の五六の書の批評に過ぎない。政治は一言も論じたことはない。以上の評論は Whig 黨の新聞に揭げても差支ないものだし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook